Osaka University Knowledge Archive

Title	室町幕府の宗教政策に関する基礎的研究
Author(s)	大田, 壮一郎
Citation	大阪大学, 2005, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/46578
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【1】

氏　　名	大　田　壮一郎（おお　た　そう いち ろう）
博士の専攻分野の名称	博　士（文　学）
学　位　記　番　号	第　１９７８３　号
学位授与年月日	平成 17 年 9 月 30 日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当 文学研究科文化形態論専攻
学　位　論　文　名	**室町幕府の宗教政策に関する基礎的研究**
論文審査委員	（主査） 教　授　平　　雅行 （副査） 教　授　梅村　　喬　　教　授　村田　路人

論文内容の要旨

本論文は、室町幕府の顕密祈禱法会やそれに動員された門跡を素材にして、室町幕府の顕密寺院政策を実証的に解明しようとしたものである。本文は全４章と序章・結とから成り、枚数は 392 枚（400 字詰め換算）である。

まず序章では研究史をふりかえり、中世後期の宗教政策研究の立ち後れを克服するには、室町幕府の顕密寺社政策についての実証の蓄積が不可欠であると述べている。第１章「室町幕府と門跡寺院」では、南北朝時代の大覚寺をとりあげた。大覚寺はこれまで南朝の拠点寺院とされてきたが、筆者は、①南北朝時代には南朝方と北朝方の二人の大覚寺門主がいた。②建武政権の崩壊後、旧門主が南朝方に参じたのに対し、室町幕府が介入して北朝方の新門主を大覚寺に入寺させて大覚寺を実効支配した。③十四世紀中葉になると両者が師弟関係を結んで門跡の再統合を果たした、ことを明らかにした。

第２章「中世門跡寺院の歴史的性格」では初期本願寺と山門系門跡との関係を検討した。そして初期本願寺の本所は青蓮院ではなく妙香院であり、妙香院は独立した所領群をもつ一条家の家門寺院であったと述べている。第３章「室町幕府と仏事法会」は足利家家督の追善仏事をとりあげた。そしてそれが足利義満期に公卿を参列させた大八講となったこと、義持期以降になると公卿伝奏・行事弁官・綱所など朝廷側の政務機構が運営を担っており、公武政権下の国家的仏事として再編されたことを解明した。

第４章「室町殿の顕密仏教構想」では、室町幕府の祈禱体制の全体構造を明らかにしようとした。そして、①初期の祈禱体制は、鎌倉幕府のそれを継承して旧幕府僧出身の武家護持僧を中心に担われた。②観応の擾乱後、三宝院門跡が「護持僧管領」と「祈禱方奉行」に任じられて武家祈禱を統轄した。③武家祈禱は門跡祈禱と武家護持僧による祈禱の二重構造へと再編され、これが室町期を通じた基本構造となっており、公武融合政権にふさわしい複合的な編成形態をとっていた、と論じている。最後に「結」として、本論文の概要をまとめている。

論文審査の結果の要旨

本論文の最大の成果は、室町幕府が主催した顕密祈禱法会の全体像とその歴史的変遷を明らかにしたことにある。黒田俊雄が顕密体制論を提起して以降、中世国家の宗教政策の解明は不可欠な課題となったが、その研究は中世成立

期に集中してきた。中世後期については基礎的事実ですら十分に明らかにされておらず、そうしたなかで室町時代における顕密寺社の衰退が一面的に語られてきた。それに対し筆者は膨大な史料を博捜し、室町幕府が主催した顕教法会や密教祈禱の全体構造を明らかにして、中世後期国家が公武融合政権にふさわしい形で顕密寺院を再編したことを解明した。これによって、鎌倉・室町幕府の宗教政策の連続面と断絶面が解明されたばかりか、鎌倉府との対比や室町幕府の政策の段階差も見通せるようになった。これは室町幕府の寺社政策論への大きな貢献であるだけでなく、室町幕府論そのものにも多大な影響を与える好論であり、高く評価してよい。

このほか、南北朝時代の大覚寺が南朝方と北朝方に分裂していたことを鮮やかに実証して、大覚寺を南朝方の拠点と捉えてきた長年の誤解を正したことも重要である。初期本願寺の本所が青蓮院ではなく妙香院であることを論証したこと、また観応の擾乱の前後における三宝院門跡の地位の変化を解明したことなども特筆すべき成果である。

とはいえ、本論文にも問題がないわけではない。筆者は足利義満期から室町殿が門跡祈禱を主催したことを明らかにしたが、門跡論そのものはなお十全でない上、室町幕府による神社編成への言及もない。しかし筆者が、斬新な問題提起をしてきた若手研究者であることからすれば、本論文での達成を踏まえて、自らの構想をさらに深めて行くことが期待されよう。本論文はその基礎となる価値を十分に有している。

よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。